



天平時代の社会改革に活躍した僧侶 行基（668—749）

栄耀栄華時代の裏側

藤原京からの遷都により、平城京が日本の都となった七一〇年から平安京に遷都する七九四年までは奈良時代とされますが、その中心は第四五代聖武天皇が在位された七二四年から七四九年まで二六年間の天平時代です。この天下泰平を連想させる年号の時代は「**あおによし** **奈良の都は** **咲く花の** **におふがごとく** **今盛りなり**」という和歌に象徴されるように、古代の栄耀栄華の時代のようにですが、実態は内乱、疫病、災害が頻発した時代でした。

とりわけ農民には穀物を自身で運搬して支払う「租」、労役で支払う「庸」、織物で支払う「調」などの課税や、防人などの兵役があり、大変な負担を強要されていた時代です。この一見すると栄華の社会の裏側にある格差を和歌で表現したのが官吏であった山上憶良（六六〇—七三三）です。『万葉集』に七八首の和歌が採択されていますが、多数は地方へ赴任したときに見聞した農民の苦闘を表現した内容で、その代表が「貧窮問答歌」です。

風雑り 雨降る夜の 雨雑り 雪降る夜は 術もなく 寒くしあれば 堅塩を 取りつづしろひ 糟湯酒うち啜ろひて 咳かひ 鼻びしびしに 然とあらぬ 髭かき撫でて 吾を除きて 人はあらじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻衾 引き被り 布肩衣 有りのことごと 服襲へども 寒き夜すらを 吾よりも 貧しき人の 父母は 飢ゑ寒ゆらむ 妻子どもは 乞ふ乞ふ泣くらむ この時は 如何にしつつか 汝が世は渡る

天地は 広しといへど 吾が為は 狭くやなりぬる 日月は 明しといへど 吾が
為は 照りや給はぬ 人皆か 吾のみや然る わくらばに 人とはあるを 人並に
吾れもなれるを 綿も無き 布肩衣の 海松の如 わわけ下がるる かかふのみ
肩に打ち懸け 伏廬の 曲廬の内に 直土に 藁解き敷きて 父母は 枕の方に
妻子どもは 足の方に 囲み居て 憂へ吟ひ 竈には 火気吹き立てず 甑には
蜘蛛の巣かきて 飯炊く 事も忘れて ぬえ鳥の のどよひ居るに いとよきて
短き物を 端切ると 言へるがごとく しもと取る 五十戸長が声は 寝屋戸まで
来立ち呼ばひぬ かくばかり すべなきものか 世の中の道
世間を憂しとやさしと思へども 飛び立ちかねつ 鳥にしあらねば

社会活動に進出した僧侶

朝廷の役人であった憶良が社会の実態を和歌として記録したことは価値ある業績ですが、その実態を改良しようとした僧侶が存在します。その僧侶である行基を今回は紹介します。近鉄奈良駅前広場の広場に両手に数珠をもつ一体の彫像が設置されていますが、これが行基です（図1）。行基は憶良と前後して六六八年に河内国大鳥郡（現在の堺市西区家原寺町）で渡来の家系とされる高志才智と蜂田古爾比売を父母として誕生しました。



図1 行基像
（近鉄奈良駅前）

一五歳の六八二年に奈良にある大官大寺で得度して出家し、法行という名前になり、二四歳のときには高宮寺の高僧の徳光禪師により受戒します。さらに飛鳥寺や薬師寺で修行し、名前を行基としました。そこで指導をした僧侶の道昭は遣唐使として入唐し、インドから経典や仏像を中国へもたらした玄奘法師から指導されたことで有名な人物ですが、帰国してから各地で井戸の掘削や棧橋の構築をした人物で、それが行基の活動に影響しています。

三六歳になって以後、母親と一緒に生活しながら奈良の一带で修行しますが、四三歳になった七一一年に母親が死亡し、それを転機に行基集団と名付けられる僧俗混合の宗教集団を形成し、近畿地方を中心に貧民救済や治水工事など社会事業活動を開始するようになりました。しかし、この行基と弟子たちの活動が活発になってきたため、僧尼の宗教活動以外の活動を規制する「僧尼令」に違反するとして、七一七年に糾弾されてしまいます。

それにもかかわらず、行基は平城京の各地で多数の人々を相手に説教するとともに、新田開発や灌漑事業を継続し、その活動が庶民だけではなく地域の豪族にも支持されるようになります。そのような時期に朝廷から二種の法令が発令されます。第一は七二二年の「良田一百万町歩開墾計画」です。現在の日本の農地面積は四五〇万町歩ですから、人口が約六〇〇万人の当時に一〇〇万町歩の開拓をすることが、いかに壮大な構想かが理解できます。

背景にあるのは人口が増加しはじめ食糧が不足気味になりつつあったことや、東北など辺境の土地での国防のために財源を必要とした当時の事情です。しかし建設機械も存在せず、人手しか労力のない時代に号令だけでは開拓は進行しないため、翌年に朝廷が発布したのが「三世一身法」という法令です。新田を開墾した場合、開墾した人間の三世代先まで田畑の私有を許可する制度です。これは行基の活動にとっては追風でした。

さらに行基は平城京の周辺で数千人の民衆を相手に説教をするなど活動していましたが、それが朝廷に歯向かうような意図ではないことが次第に判明してきたため、朝廷は新田開発や治水事業に行基の能力を利用する方向に転換します。そして七三六年にインド出身の僧侶の菩提僊那が来日したときには行基が出迎えて平城京を案内して対応したため、七三八年には行基は「行基大徳」という称号まで授与されるようになりました。

一五ヶ所に建造した溜池

ここで行基集団が実施した事業をいくつか紹介します。大阪市の東側に隣接する大阪狭山市の中心に面積四〇ヘクタールにもなる広大な狭山池という溜池があります(図2)。一帯の河内平野は水利の不便な地域で古代から多数の溜池が造成されていますが、狭山池はダムを建設して実現した溜池としては日本最古で、二〇一四年には国指定重要文化財に指定されています。行基集団は一五の溜池を実現していますが、その代表です。

河内平野に溜池が造成されたことは古代の史書に記録されていますが、『古事記』には第一一代垂仁天皇の時代に狭山池が実現したと記録され、『続日本紀』には七三二年に工事をしたことや七六二年に決壊した狭山池を修造したという文章がありますし、行基の活動を記録した『行基年譜』には七三一年に「狭山池院」と「狭山池尼院」を起工したという記録があるので、工事に参加する信者を現地で教育していたことも推察できます。



図2 狭山池



図3 久米田池

行基集団が建造した狭山池よりも一回り広大な四六ヘクタールの面積がある溜池が岸和田市にある久米田池です(図3)。周囲には最高で堤高が九メートルにもなる盛土の堤防が構築されています。地図によると周辺には多数の溜池が存在しており、用水の確保に苦勞してきた地域ということが理解できます。しかし、二〇〇メートルほど東側に水量が豊富な牛滝川が流下しており、その上流から取水して用水を確保してきました。

淀川流域の広大な沼地を干拓

行基は河川改修にも挑戦しています。最大の挑戦が淀川の改修でした。かつて淀川の上流には巨椋池という広大な湖水がありました。北西から桂川、北東から宇治川、東側から木津川が流入し、面積は八平方キロメートル、富士山麓にある河口湖より一回り広大な湖沼でした。残念ながら一九三〇年代に干拓され、現在では消滅してしまいました。この湖水の効果で行基の時代には淀川の氾濫は頻発せず、流域の開拓が課題でした。

要所は巨椋池からの水流の出口となる山崎、中流で河川が方向転換する枚方、下流で二本に分流する大隅でした。行基は山崎には久修園院と山崎院、枚方には枚方院と薦田尼院を設置し、周辺を開拓していきます。そして行基集団が集中して開拓したのが淀川と並行して左岸を流下する古川と淀川の間にある二〇平方キロメートルに

もなる広大な沼地で、そこを干拓して農地にするという壮大な構想でしたが、見事に達成しました。

社会安泰祈願の大仏建立

このような行基集団の実行能力に注目したのが聖武天皇でした。在位の八世紀の中頃、日本には様々な災難が襲来していました。疫病が流行して当時の政権の中樞にあった藤原武智麻呂、房前、宇合、麻呂の四人の兄弟が相次いで死亡し、さらに旱魃による飢饉が発生していたところに、七三四年にマグニチュード七と推定される畿内七道地震が発生して奈良を中心に多数の家屋が倒壊し、多数の死者が発生するという状態でした。

そこで聖武天皇は厄払いのため、七四〇年に恭仁京、七四四年に難波宮、翌年に紫香樂宮に都を移動させますが効果はなく、四ヶ月後には平城京に帰還するという混乱でした。途中の七四一年には全国に国分僧寺と国分尼寺を建立しますが際立った効果はなく、七四三年に盧舎那仏の巨像を建立する決定をします。当初は紫香樂宮に建立の計画でしたが、周辺で森林火災が発生したため、平城京に安置することとし、七四五年から制作が開始されました。

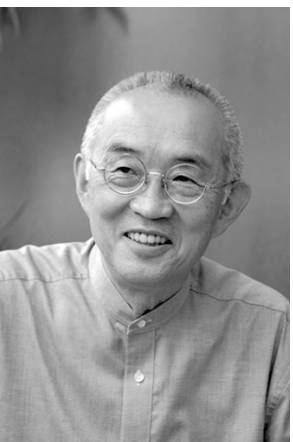
そのような時期の七四三年に聖武天皇は行基に直接出会い、大仏造営のための勧進（資金調達）の役目を依頼します。その効果は抜群で、行基は全国から大量の資材と大量の労力を調達することに成功し、その感謝の気持ちから聖武天皇は行基に日本最初の仏教界最高位の「大僧正」の称号を授与しました。地上からの全長一八メートル、重量二五〇トンの盧舎那仏は七年の年月と延二六〇万人以上の労力をかけて七五二年に完成しました（図4）。



図4 盧舎那仏（再建）

四月九日、かつて行基が出迎えたインドの僧侶菩提僊那を導師として盛大な開眼供養が執行されましたが、すでに退位しておられた聖武天皇は聖武上皇として参列し、女帝である孝謙天皇を筆頭に朝廷の高官や僧侶など約一万人が参列する盛大な式典でした。残念ながら三年前の七四九年に八一歳で入滅していた行基は参列できませんでした。しかし、その功績は聖武天皇、菩提僊那、東大寺を開山した良辨とともに東大寺の四聖とされています。

参考資料 尾田栄章『行基と長屋王の時代』現代企画室 2017



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本 百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。最新刊は『凜凜たる人生』（遊行社）。